

アドバンス助産師が助産師外来で初めて関わる ローリスク妊婦を捉える視点

Perspectives of Advance Midwives in Understanding Low-Risk Pregnancies

天野 藍香¹⁾, 小林 康江²⁾

AMANO Aika, KOBAYASHI Yasue

要 旨

- 【目的】** アドバンス助産師が助産師外来で初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点を明らかにする。
- 【対象と方法】** 6名を対象に半構成的面接を実施し、継続的比較分析を行った。
- 【結果】** 《個の特徴を捉える視点》をコアカテゴリーとし、【個別性を意識した関わりのための視点】、【妊娠経過が順調であるかを判断する視点】、【今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】、【関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点】、【児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点】、【今後の出産・育児を行っていけるかどうかを捉える視点】の6つのカテゴリーと10のサブカテゴリーで構成されていた。
- 【考察】** 視点の特徴として、統合した判断、情報収集の多様性、助産師の価値観や経験値の反映が挙げられた。具体的な情報と方法が明らかになり、新人助産師や妊婦との関わり方の経験の浅い助産師の教育の示唆が得られた。
- 【結論】** アドバンス助産師が妊婦を捉える視点が明らかとなった。

- 【Objective】** To clarify the perspectives of Advance Midwives in the initial understanding of low-risk pregnancies.
- 【Methods】** Six Advanced Midwives took part in semi-structured interviews.
- 【Results】** The interviews extracted one core category and six general categories. The core category was 《the midwives' ability to understand the individual characteristics of each mother》. The six general categories were midwives' awareness of mothers' individuality, ability to judge the normal or abnormal progression of pregnancies, midwives' understanding of pregnant women's self-awareness of their pregnancies, midwives' understanding the needs of pregnant women, midwives' awareness of the mothers' affection and attachment to the baby, and the perspective to judge whether or not the mothers can give birth and do childcare in the future.
- 【Discussion】** The main areas that Advance Midwives need to understand are integrated judgement, diversity of information, and the reflection of the values and experiences of the midwives. This study clarified the specific perspectives of Advance Midwives, and seeks to advance education of clinical/education midwives.
- 【Conclusion】** It is clear that investigating the perspectives of Advance Midwives has clinical benefits for pregnant women.

キーワード アドバンス助産師, ローリスク妊婦, 助産診断

Key Words Advance Midwife, Low-Risk Pregnancy, Midwifery Diagnosis

受理日：2019年6月25日

1) 山梨大学医学部附属病院看護部：University of Yamanashi Hospital

2) 山梨大学大学院総合研究部成育看護学講座：University of Yamanashi, Graduate School of Interdisciplinary Research, Faculty of Medicine, Division of Nursing Science (Maternity Nursing & Midwifery)

I. はじめに

助産師は自律して正常な妊娠経過を管理することができる。現在、医療機関において外来で正常経過の妊産婦の健康診査と保健指導を助産師が自律して行う助産師外来がある。一般的な妊婦健診は、医師のみが行うことが多いが、助産師外来は、医師と協働し決まった週数で助産師が健診を行っている。助産師外来は、日本助産評価機構の定めるアドバンス助産師の認証を得た助産師が実施している。助産師外来の対象は、妊娠前の合併症がなく、妊娠経過が順調であることが予測され、身体的にも、精神的にも落ち着いている妊婦である。助産師外来の妊婦のメリットは、身体的な健診と妊婦の現状や不安等を傾聴できる保健指導が一体化しており、助産師と関わる時間を長く持てることである。妊婦が日常的な疑問・不安について気軽に相談することができるため、ニーズが高まっている¹⁾。助産師にとっても助産師外来のメリットは大きく、積極的に専門性を発揮することができる場となっている。

しかし、妊娠は女性にとって大きなイベントであり、身体的な変化だけではなく、心理的・社会的変化も伴う。女性をとりまく環境も複雑化し、齋藤は、現在の女性は、妊娠した場合に適切なマタニティライフを営む能力を習得しておらず、核家族化で相談相手も少なく不安の多い生活になると指摘している²⁾。助産師外来の対象となるローリスク妊婦も、身体的には、正常な経過が予測される妊婦であっても、妊娠経過の中での様々な変化から、正常から逸脱をする可能性がある。また、養育について妊娠中から社会的資源を必要とする特定妊婦など、社会背景が複雑な妊婦も対象となる。助産師は、そのような妊婦を対象に、妊婦を捉え、介入していかなければならない。ひとりの妊婦に対し、同じ助産師が妊娠期の継続的な関わりを行っていくことが求められているが、同じ助産師が継続的に関わるのではなく、ある助産師が妊婦と各時期に初めて会い、関わるのが少なくない。助産師は初めて関わる妊婦を理解し、介入していくことが求められている現状がある。

助産師外来で、専門性を発揮でき、やりがいを感じながらも、責任と関わりの困難感を感じている助産師もいる。関わりの困難感は、初めて会う妊婦を捉え、介入していかなければいけない現状からきていると考える。保健指導の能力や助産師外来に求められる能力を謳う文献はあるが、実際の助産師が行う臨床でのローリスク妊婦のアセスメント過程やその能力の具体的思考過程を示した文献はない。本研究は、臨床のアドバンス助産師が助産師外来で初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点を明らかにすることを目的としている。

II. 方法

1. 研究方法

質的記述的研究

2. 研究対象

1) 研究協力施設

助産師外来を行っている2施設。A病院は週2回、1人あたり45分、13週、24週、30週、38週の妊婦を対象に助産師外来を行っていた。また、B病院は週2回、1人あたり60分、初期(9-10週)、中期(20週前後)、末期(30週前後)に医師健診を行い、その他の妊婦健診週数で助産師外来を行っていた。

2) 研究協力者

日本助産評価機構の定めるアドバンス助産師の認証を得ている6名

3. 調査期間

平成28年9月23日～平成29年11月30日

4. 研究過程

1) データ収集

データ収集は半構成的面接とし、面接内容が協力者間で大きな差異がないようにあらかじめ作成したインタビューガイドを使用し面接を実施した。インタビューの内容は、助産師外来での場面を想定し、初めてローリスク妊婦に関わる視点について、具体的な臨床で実施していること・妊婦との関わり方の体験について質問をし、語ってもらった。

2) データ分析方法と手順

本研究目的は、アドバンス助産師の臨床での体験や意見・行動の理由の語りから、助産師外来においてローリスク妊婦をどのように捉えているかを明らかにすることである。そのため、助産師の語りから、視点の内容を抽出し、抽象化し、それぞれのデータの類似性や相違を絶えず比較する継続比較分析を行った。分析過程では、研究協力者へのフィードバックを行い、内容の確認を行った。収集ごとに分析の結果を絶えず比較し、データ収集に反映することを繰り返し、結果の妥当性を高めた。客観性を高めるため、分析ソフトウェアKH coder(Ver.2)を用いて、6名それぞれのデータに対して、抽出された用語の出現パターンが似ていたり関係性が強いことを示す共起関係が太い線で結ばれる、共起ネットワーク分析を行った。分析結果から得られた共起性や関係性を基に、助産師の視点の内容の吟味を繰り返し、データの抽象化の補足を行った。すべての分析過程において、研究者間でのメンバーチェックを実施した。

5. 倫理的配慮

本研究にあたっては、研究者の所属施設、山梨大学医学部倫理委員会にて研究計画書の審査を受け、承諾を得た(承認番号 1707)。

III. 結果

1. 研究協力者の背景

6名の研究協力者の助産師としての臨床経験年数は8～24年、平均は13年であった。6名全員がアドバンス助産師の資格をとってからの実務経験は2～3年であった。1カ月の助産師外来実施件数は6～10件で、平均は6.6件であった。

2. カテゴリーの抽出

アドバンス助産師が助産師外来で初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点を表1に示す。コアカテゴリー《個の特徴を捉える視点》が見出された。コアカテゴリーを構成するカテゴリーとして、10のサブカテゴリー、6のカテゴリーにまとめられた。以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは[]で示す。助産師がその視点で妊婦を捉えるに至った情報、助産師が情報と認識として語ったものを〈 〉で示す。面接データは「 」を用いて各カテゴリーの内容を示す。面接データ横に示されたアルファベットは各助産師と面接データを整理するために用いた数字を示している。

3. カテゴリーの意味

1) 《個の特徴を捉える視点》

コアカテゴリーの“個を捉える”とは、アドバンス助産師がローリスク妊婦と関わる前と、実際に関わっている最中の場面で、常に関わる妊婦の個人の特徴を捉えようとしていることであった。個人を重んじ、妊婦の個別的な関わりを常に意識し、個を捉えようとしていた。“特徴を捉える”とは、単なる他と比べ、その妊婦に特化した点の意味ではなく、妊婦自身の個性や全体を含んで、妊婦の特徴としている。つまり、《個の特徴を捉える視点》は、常にアドバンス助産師が、関わる妊婦の個人の特徴を統合的に捉え、介入しようとしていることであった。妊婦の特徴を捉え、妊婦にとって必要な介入の選択をし、妊婦それぞれに合った個別的な関わりを行うため、その都度、助産師が妊婦を捉え、判断し介入を行っていた。関わりは、妊婦一人ひとりによっての多様性があり、その個別的な多様性に対応していた。

2) 【個別性を意識した関わりのための視点】(表2)

既存の情報から、関わる妊婦に特化した特別な情報を選別し、状況判断を行っている。情報としては、〈初・経産〉、〈妊娠週数〉、〈身体的情報〉、〈社会的情報〉、〈前回までの助産師が介入した内容や捉えた内容〉を査定し、妊婦との関わりに個別的な関わりを行っている。

「まずカルテでその人の情報をもって、まあ初期の時点か最初のころに指導されていたこととか、経過はもちろんですけど、それ以外の、その人にとっての特別な指

表1 アドバンス助産師が助産師外来で初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
個の特徴を捉える視点	個別性を意識した関わりのための視点	・既存の情報からその妊婦の個別性を見出す ・妊婦と関わりその妊婦の個別性を捉える
	妊娠経過が順調であるかを判断する視点	・過去の状況を査定する ・現在の状況を査定する ・未来を予測する
	今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点	・今の妊娠を妊婦がどう捉えているか
	関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点	・関わる妊婦のニーズは何かを捉える
	見への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点	・見への愛着・愛情があるかどうかを捉える
	今後の出産・育児を行っていくかどうかを捉える視点	・家族・妊婦の周りの人を捉える ・その妊婦を捉える

表2 個別性を意識した関わりのための視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
個別性を意識した関わりのための視点	助産師が初めて関わるローリスク妊婦に対し、妊婦の個別性を意識し、個別的な介入を行うために妊婦を捉える視点である。	・既存の情報からその妊婦の個別性を見出す ・実際に妊婦と関わりその妊婦の個別性を捉える	助産師は、初めて妊婦に関わる前に、準備としてその妊婦がどのような人なのかを捉え、妊婦の全体像を把握することで、個別性を考えた関わりを行っている。助産師が事前に捉えた視点から今回どのように関わっていくかを決定している。 助産師が初めて妊婦と関わり、対面中に受け取る情報から、妊婦を捉えて個別的な関わりをもっている。

導ってところとかを意識して情報をとっている。」(E1)

「その前(関わる前)に情報を見られれば、何週でとか、前回の経過とか、アナムネ用紙っていうか、(中略)初期のものがあるんですけど、誰と住んでいるとか、まだそのとき未婚とか、途中で苗字が変わっているとかそういう情報があるので、社会背景を見て、お名前が変わっていれば、誰と住んでいるのかなっていうのをお話ししながら、聞いていきますかね。」(A2)

「緊張しているかなとか、どんな思いでここに来たかなとか、うれしそうかなとか。まず、表情でとらえますかね、その人を。」(C4)

3) 【妊娠経過が順調であるかを判断する視点】(表3)

3つのサブカテゴリーで構成され、判断のための情報として、〈妊婦の身体的情報と胎児に関する情報〉、〈精神的情報〉、〈社会的情報〉を査定している。それぞれの情報で正常からの逸脱はないかを判断している。助産師は、過去・現在・未来のそれぞれの査定を行っているが、それらをすべて統合し、妊娠が順調であるかの判断を行っていた。

「まず血圧、体重とかを確認しますよね、大丈夫かなって見て、(中略)エコーして、正常が逸脱、異常があったら先生に診てもらわなきゃいけないから、エコーをしながらお話しして、変わったことはないかなってみつつ、エコー中にお腹の張りがあるようだったら、切迫早産の兆候はないかなとか。」(B5)

「産後とかね、なんか頼れる人がいるのかなとか、エ

ジンバラ高くなりそうだなとか。」(F16)

4) 【今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】(表4)

助産師は、[今の妊娠を妊婦がどう捉えているか]を大切に、妊婦が自身の身体の変化を自覚できているか、関心をどれくらい持っているのかということも判断し、指導や関わりに繋げていた。捉えるための情報としては、〈対面時の表情〉、〈上の子との関係〉、〈身体の変化に関する発言があるか〉から、妊婦を捉えていた。そこには、助産師の妊娠期を楽しい思い出にしてほしいという思いや、今の妊娠期を負担ではなく、肯定的に捉えてほしいという助産師の価値観が反映されているという特徴があった。

「お腹が大きくなってきて、生活がしづらくなってきたとか、後期だったら、初期だったら、つわりがどうかとか、お腹の赤ちゃんの胎動わかるようになってきてどうかとか、いいことも悪いことも含め、その人が今、その妊娠とか出産とかに感じていることを聴いているかな。」(A12)

「簡単なことだと、乳首黒くなってきたんですけどとか、割れてきちゃったんですけどとか、結局見ているってことじゃん、自分の身体。それって自分の身体が診れて、コントロールまでは行っていないだろうけど、気づいているんだなって思うから、(略)。」(F57)

「妊娠生活を楽しめているかなっていうのは、ちょっと私の中に疑問というか、そこをぜひ楽しんでもらいたいって思いがあるんですよ。」(A12)

5) 【関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点】(表5)

助産師は妊婦のその場で[関わる妊婦のニーズは何か

表3 妊娠経過が順調であるかを判断する視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
妊娠経過が順調であるかを判断する視点	助産師が関わる前、関わっている最中に行っている判断の視点であり、助産師は、妊娠経過が母子ともに正常かどうかの判断を行っている。過去・現在・未来のそれぞれの査定を行っているが、それらをすべて統合し、妊娠が順調であるかの判断を行っている。	・過去の状況を査定する	前回までの経過について、カルテからの情報を基に、妊娠経過が正常かどうかの判断を行っている。過去の状況の査定は、関わっている現在の状況の査定にも活かされている。
		・現在の状況を査定する	助産師外来で助産師が実際に妊婦に関わり、現在の妊娠経過が正常からの逸脱はないかどうかの判断を行っている。
		・未来を予測する	助産師が実際に妊婦に関わり、今後の妊娠経過や産後に正常からの逸脱のリスクがないかどうかを考えながら妊婦を捉える。

表4 今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点	助産師が、妊婦自身が妊娠をどのように捉え、感じているのかを捉えている視点である。	・今の妊娠を妊婦がどう捉えているか	妊婦が自身の身体の変化を自覚できているか、関心をどれくらい持っているのかということも判断し、指導や関わりに繋げている。

表5 関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点	助産師外来に来た妊婦がその時に感じているニーズを捉える視点であり、助産師は妊婦のその場でのニーズを捉える視点である。	・関わる妊婦のニーズは何かを捉える	ニーズは妊婦によって違い、妊婦の発言から、妊婦の感じている不安や、気になることに答えたり、会話の中から捉える。

を捉える]ことを大切にしていた。ニーズは妊婦によって違い、妊婦の発言から、妊婦の感じている不安や、気になることに答えたり、会話の中から捉えていた。情報は、〈関わる妊婦のニーズ〉を妊婦の発言から汲み取っている。妊婦の発言を聴く中で、助産師自身が妊婦にとって必要であると考えている内容に対して妊婦自身も気になっているのかどうかを査定し、妊婦への介入に繋げている。

「優先順位的に例えば自分がしゃべっていて、最後時間が無くなって患者さんのニーズが全然答えられなかったら、不安が解消できないまま帰ってしまって、また1週間～2週間不安なところで過ごしていかなければいけないのであれば、まずは、妊婦さんの不安なところから、私は聞いていくんですけど(中略)。」(C27)

「(中略)母のニーズは(赤ちゃんの)顔を見ることだったりかなって思うので、その時間を多く取ったりしていますかね。もちろん、正常な赤ちゃんだってことは根本にあって、それが自分の中で分かったら、あとは母のニーズに答えてるって感じですかね。」(C9)

「本人が気になっているのか、なっていないのかっていうのもわかるじゃんね。こっちが体重が増えているのが気になっているけど、本人全く思っていないかもしれないし、同じかもしれないみたいな、っていう意図かな。」(F5)

6) 【児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点】(表6)

助産師は妊婦や家族が[児への愛着・愛情があるかどうか捉える]ことを大切にしていた。助産師は、〈妊婦の児に関する発言〉〈エコー中の表情や様子〉の情報から妊婦の児への愛着・愛情があるかどうかを捉えていた。妊婦や妊婦健診に同伴した家族のエコー中の表情を見たり、児に関する発言内容から、児に対して関心が向いていることや、楽しみにしていることを汲み取り、捉えていた。また、助産師外来では、児への愛着を促すような問いかけや関わりもされていた。この視点は、助産師の妊娠受容が進んでいない妊婦との関わり等の過去の経験

も反映されていた。

「表情とか、あとは、その人赤ちゃんに対してあんまり、赤ちゃんのことをあんまり聞いてこないとか関心が薄そうだなって人とか、あとは自分、話を聞いていても他人事のように返してくる人とか、あとは自分の体調とか、仕事の方が忙しくて赤ちゃんよりそっちに意識が向いている人とか気になるかな。」(E21)

「エコーしながらの本人の表情を見ますね、何を聞いてくるかとか、性別を聞かれることが多いですけど、ちゃんと赤ちゃんの質問がでてるかどうかっていうのも見ますね。ない人もいますからね。15歳、16歳の子はしてこなかったですね。言わない人もいます。言わないと、見ながら笑ったり、何かしているかなってことを見ていきますね(中略)、そこから赤ちゃんへの愛情はあるかなって見ますね。」(A26)

7) 【今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点】(表7)

[家族・妊婦の周りの人を捉える]では、〈誰と受診しているのか〉、〈経産婦は受診中に上の子を誰に預けているのか〉、〈家族との関係性〉の情報から、妊娠中や産後の支援者、育児環境を査定していた。[その妊婦を捉える]では、〈経済的情報〉、〈その妊婦の理解度〉、〈前回の出産エピソード〉の情報から判断をしていた。助産師の過去の妊婦との関わり方の経験が多く反映されている特徴があった。

「(中略)お子さんが経産婦さんだと、お子さんを連れてくれば、1歳、2歳の子ってあまり連れてこない人もいますよね。そうすると、誰が今日は、どこにあずけていますとか、保育園にあずけていますとか、親がみえていますとか、親がみえていますってことは、産後もお手伝いが得られるのかなってそこでもう単純に思えるし、保育園にあずけているって聞くと結構早いねって。例えば2歳とか1歳であずけているなら、結構早くにあずけているんだな、お仕事何しているのかな、っていうような事とかが気になったり。」(A4)

表6 児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点	助産師が、妊婦や家族が児への愛着・愛情があるかどうかを判断している視点である。	・児への愛着・愛情があるかどうかを捉える	妊婦や家族が児への愛着・愛情があるかどうかを判断している。

表7 今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点

カテゴリー	意味	サブカテゴリー	意味
今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点	妊婦が産み、育てていきけるかどうかという視点で妊婦を捉えている視点である。妊婦が今後の出産・育児をどうしていくのか・介入すべきところはあるか等の判断を行っている。	・家族・妊婦の周りの人を捉える ・その妊婦を捉える	家族や妊婦の周りの人についての情報をとり、想像し、今後の出産・育児に家族や妊婦の周りの人がどう関わってくるのかを捉える。 助産師が妊婦と実際に関わる中で、今後、妊婦が産み、育てていきけるかどうかを判断する。

「もちろん家庭環境, 経済的なもの, あとはその人の理解力とかですよね。この人話しているけど聞いていないとかいますよね。だからパーソナリティーだったり, 環境はもちろん聞きますよね, 一人で育てていくわけではないからね。」(B12)

「ご主人様は楽しみにしていますか?とか, ご主人の疑問に思っていることはない?とか。なにか聴いてきていることない?ってそんな感じ。おばあちゃんとか, 心配して何か聞いて来いっていつてない?って。それでなんかその人が家族から見られているのかなとかさ, 何となくわかるじゃん。」(F14)

4. カテゴリー間の関係性

アドバンス助産師が妊婦を捉える視点に関するカテゴリー間の関係性と特徴を図1に示す。アドバンス助産師が初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点は, アドバンス助産師の過去の経験や助産師の価値観が反映され, 基盤となっている。アドバンス助産師の語りの中で, 産後のエジンバラ得点が高くなった妊婦や, 児への愛着が進んでいなかった若年の妊婦などの過去のハイリスク妊婦との関わりからの経験から, 表情や行動の情報収集をしていた。また, 助産師自身が, 妊婦に対して, 妊娠経過を楽しく過ごしてほしいと思う価値観も反映されていた。その基盤の上に, 6つのカテゴリーが存在している。

アドバンス助産師は, 個の特徴を捉える上で, 常に過去の情報や, 現在の関わりからの情報を整理しながら妊婦と関わり, 未来を予測している。【個別性を意識した関わりのための視点】

【今この妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】は, 対面前と対面中に個別的な介入を行うために助産師が妊婦を捉える視点である。カルテに記載された, 以前の妊婦健診結果や他の妊婦が関わった情報を基に, 妊婦を捉えることであり, その中には, 過去の妊娠経過が順調であるか否かの判断の視点が含まれている。また, 実際の助産師が妊婦と関わる中で, 助産師が個別的な介入を行うための視点であり, 【今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】と関係が近い。【今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】は, アドバンス助産師が, 妊婦が今どのように妊娠を捉えているかを捉える視点であり, 対面した妊婦からの発言や情報を基に判断を行っている。妊婦が何を感じ, 求めているかという【関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点】に近い関係である。アドバンス助産師は, 関わる妊婦によって多様性がある中で, 妊婦を捉えながら関わりを持っている。【児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点】と, 【今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点】は, 関係が近く, 【児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点】は, 【今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点】に影響を及ぼしている。そのため, アドバンス助産師は, 助産師外来のエコー中や会話の意図的な関わりの中で, 児への愛着・愛情形成が進むように介入をしていた。

6つのカテゴリーを集約し, コアカテゴリーの《個の特徴を捉える視点》が中心に存在している。アドバンス助産師は, カテゴリーを統合し, 個の特徴を捉えながら妊婦と関わっている。

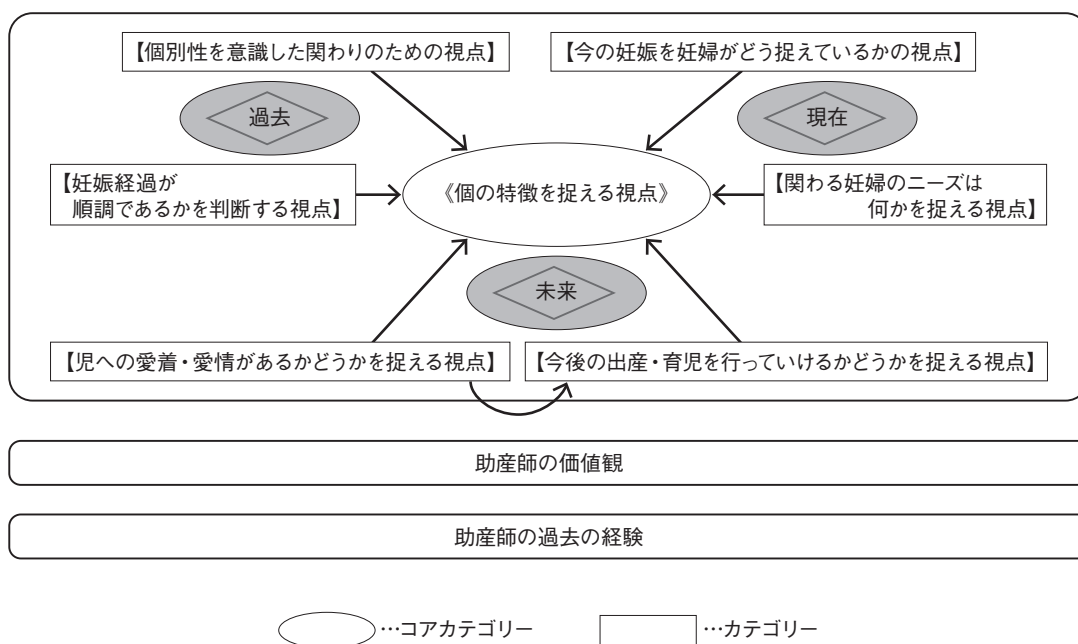


図1 アドバンス助産師が妊婦を捉える視点に関するカテゴリー間の関係性と特徴

IV. 考察

1. アドバンス助産師のローリスク妊婦を捉える視点の特徴

アドバンス助産師が初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点の特徴は3つあると考える。1つ目は、視点の統合した判断と介入である。アドバンス助産師は、助産師外来を行うにあたり、常に、過去・現在・未来について継続した視点で妊娠経過の正常からの逸脱がないかの判断を行っている。また、6つのカテゴリーの視点を統合し、関わるローリスク妊婦の特徴を捉えている。アドバンス助産師は、捉えた視点から、妊婦の特徴を見出しながらどのような個別な関わりを行っていくか熟慮し、介入を行っている。齋藤³⁾は、助産師外来に必要な助産師の能力として、妊娠経過の診断と日常的な生活の健康の双方からの診断を挙げているが、ローリスク妊婦を捉える視点として、複雑な妊婦の身体的・社会的・精神的背景を助産師は考慮し、日常的な生活の健康だけではなく多角的な方面からの視点とその判断が必要であると考える。アドバンス助産師は実際の助産師外来で視点を統合し、判断と介入を行っている特徴があった。

2つ目の特徴は、視点の網羅と情報収集の多様性である。6名のアドバンス助産師それぞれが、カテゴリーで示された視点で妊婦を捉えているが、1つの視点を捉えるための情報と、その情報を得るための方法・手段は、アドバンス助産師それぞれによって異なり、多様性があった。また、情報を得るための方法・手段に関しては、児への愛着を確認する際には、エコー中の表情を確認したり、育児支援者がいるかどうかを確認する際には、受診時に誰と来ているかの情報から得るなど、助産師毎にパターン化がされていた。本研究で行ったアドバンス助産師を対象とした面接は、実際の助産師外来の場面を想定しながらの語りであり、臨床の場での助産師の行動や思考の語りであるといえる。1つの情報から多角的な視点で捉えるのではなく、アドバンス助産師が捉える視点とそのための情報はそれぞれ対になるような思考である可能性があるといえる。

3つ目は、助産師が妊婦を捉える視点には、それぞれの助産師の経験値と価値観が反映されていることである。妊娠期を楽しく過ごしてほしいという助産師の価値観が妊婦との関わり方の情報に表れていた。経験値については、精神的ハイリスクや身体的ハイリスクとの関わり方の経験があるからこそ、ローリスク妊婦を捉える場合にも、ハイリスクの視点があり、過去の経験と比較しながらリスク判別を行っていた。また、アドバンス助産師の視点の網羅と情報収集の多様性の部分でも、助産師毎の違いが見られた。これは、それぞれの助産師の経験が反映されていると考える。アドバンス助産師は、多数の妊婦との

関わり方の経験値を基に、妊婦を捉えるための視点とそのための情報を得るための方法・手段を構築していた。

研究結果より、アドバンス助産師のローリスク妊婦を捉える視点の中核となるコアカテゴリーは《個の特徴を捉える視点》であり、アドバンス助産師は、自らの経験や価値観を基に、常に妊婦の個の特徴を捉えようとしている。北村ら⁴⁾は、保健指導において、妊婦の反応に応じて指導内容・指導方法を変更する力が必要であると述べている。アドバンス助産師は、妊婦の個の特徴を捉えることで、個別な介入を行うことができ、その個の特徴を捉えるための視点は、情報収集・収集方法の多様性があった。

2. 臨床での新人助産師や妊婦との関わり方の経験の浅い助産師の教育の示唆

助産師が個の特徴を捉える意味としては、個別な関わりをすることにある。アドバンス助産師は、常に関わる妊婦の個別性を意識し、その個別性を活かしながら助産師が介入していく姿勢がみられた。また、関わる妊婦によって、妊婦の特徴やニーズは様々であり、その都度、助産師が応えるように介入していた。その能力がアドバンス助産師のもつ能力であるといえる。対象となる妊婦を捉え、判断し、介入を行っていく。しかし、新人助産師や経験の浅い助産師は、限られた関わり方の時間の中で、初めて会う妊婦の個の特徴を捉え、判断し、介入していくことに困難感を感じている現状がある。困難感を抱きながら、関わることで、個の特徴を捉えることより先行して、介入に重きが置かれてしまい、個性が反映されず、妊婦に対して一方的な関わりになってしまう傾向にあると考える。北村ら⁴⁾は、助産師教育において、学生と助産師との能力の解離について「妊婦にとって必要な内容を厳選する力」を挙げ、それは、経験の浅い助産師にも共通すると考える。妊婦がどのような人なのか、妊婦を捉える視点が重要であり、妊婦を捉えることは個別な関わりへと繋がるため、重要である。妊婦はルーチン的な指導を受けることに対して有益と感じておらず、自分の要求に対して指導を受けることで要求が充足されると、関わりを肯定的に受け止め、助産師に対しての信頼を寄せる⁵⁾とされ、個の特徴を捉え、妊婦のニーズに添えていくことが重要となる。しかし、どう個の特徴を捉えればいいのか問題であり、具体的な視点や視点を判断する情報が不明確であった。本研究から6つのカテゴリーが見出され、それぞれに具体的な視点を捉え、判断の基となる情報が明らかになった。これらの結果は、アドバンス助産師の経験に基づくものであり貴重な資料であると考えられる。アドバンス助産師それぞれに、視点の網羅はみられたが、視点を捉える具体的な情報の内容や方法は多様性があり、新人助産師や経験の浅い助産師に

とって臨床の現場で有用であると考えられる。本研究結果から多様な情報内容や情報収集の方法・手段を学ぶことで、1つの視点を捉えるために、多角的な視点で情報を統合できるようになると考える。また実際の臨床の現場で、助産師が関わりながら妊婦を捉えていることや、多様性がある情報の収集方法であった結果を踏まえ、アドバンス助産師のように経験の多いスタッフと経験の浅いスタッフとが一緒に助産師外来を行い、学ぶことも重要であると考え。助産師外来は、基本的に助産師が一人で行う体制が多く、他の助産師の関わりが助産師間で見えにくい現状がある。しかし、スタッフ同士で意見交換や、一緒に助産師外来を行うことも他の助産師の個を捉える情報や手段を学ぶことができ、学びに有意義であると考え。個の特徴を捉え、個別性のある妊婦への関わりを行うことができれば、質の高いケアの提供ができ、助産師の抱く、妊婦との関わりでの困難感は解決されると考える。

V. 結論

アドバンス助産師が助産師外来で初めて関わるローリスク妊婦を捉える視点を示すコアカテゴリーは、《個の特徴を捉える視点》であった。さらに、このコアカテゴリーを構成するカテゴリーは、【個別性を意識した関わりのための視点】、【妊娠経過が順調であるかを判断する視点】、【今の妊娠を妊婦がどう捉えているかの視点】、【関わる妊婦のニーズは何かを捉える視点】、【児への愛着・愛情があるかどうかを捉える視点】、【今後の出産・育児を行っていきけるかどうかを捉える視点】の6つで構成されていた。

6つのカテゴリーには、それぞれの視点を捉えるための情報があり、情報と情報収集の方法が明らかになった。アドバンス助産師は、カテゴリーで示された視点で妊婦を捉えているが、1つの視点を捉えるための情報と、その情報を得るための方法・手段は、アドバンス助産師それぞれによって異なり、多様性があった。また、情報を得るための方法・手段に関しては、助産師毎にパターン化がされていた。また、カテゴリーは、アドバンス助産師の価値観や経験が反映されていた。

VI. 今後の課題

経験が豊富であり、助産師外来を行うことのできる能力のあるアドバンス助産師の実際の具体的な視点や関わりはとても貴重なデータである。本研究から臨床での、教育の示唆を示すことができたと考え。今回の結果でアドバンス助産師の特徴として、1つの視点を捉えるための情報と、その情報を得るための方法・手段は、多様

性があったが、情報を得るための方法・手段に関しては、助産師毎にパターン化がされていた。このことより、研究結果を用いて、アドバンス助産師も他のアドバンス助産師の実際を知るきっかけとなり、情報や手段の方法の拡大が期待できる。そのことは、結果的に初めて関わる妊婦を捉える視点を様々な角度より捉えることに繋がり、ケアの向上になると考える。

アドバンス助産師ではなく、新人助産師や妊婦との関わりでの経験の浅い助産師のローリスク妊婦を捉える視点や、助産師のハイリスク妊婦を捉える視点を明らかにし、比較することで、アドバンス助産師との思考過程の解離が明らかになり、今後の助産師教育の示唆を得ることができると思う。

謝辞

本研究にあたり、研究にご協力いただきました対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は2018年度山梨大学大学院医学工学総合教育修士論文の一部を加筆・修正したものである。なお、本研究は平成29年度山梨大学看護学会研究助成金の助成を受けて行った。

利益相反

本研究は利益相反に関する開示事項は無かった。

引用文献

- 1) 中林正雄 (2008) 助産師外来のあり方と意義. 母子保健情報, 58: 30-32.
- 2) 齋藤益子 (2010) 妊婦健診体制の問題点 - 助産師の立場から -. 周産期医学, 40(1): 13-17.
- 3) 齋藤益子 (2011) 助産師外来は妊婦健診体制を変えるか - 妊娠期に助産師がかかわる意味 -. 母性衛生, 52(1): 61-67.
- 4) 北村万由美, 藤原弘子, 他 (2016) 助産師教育における妊婦保健指導実習での学生の課題 - 臨床指導者の自由記述評価より -. 母性衛生, 56(4): 710-719.
- 5) 槻木直子, 山本あい子 (2013) 助産師外来を担当する助産師が考える「自立してケアを行うために必要な実践能力」についての調査. 兵庫県母性衛生学会, 22: 55-58.